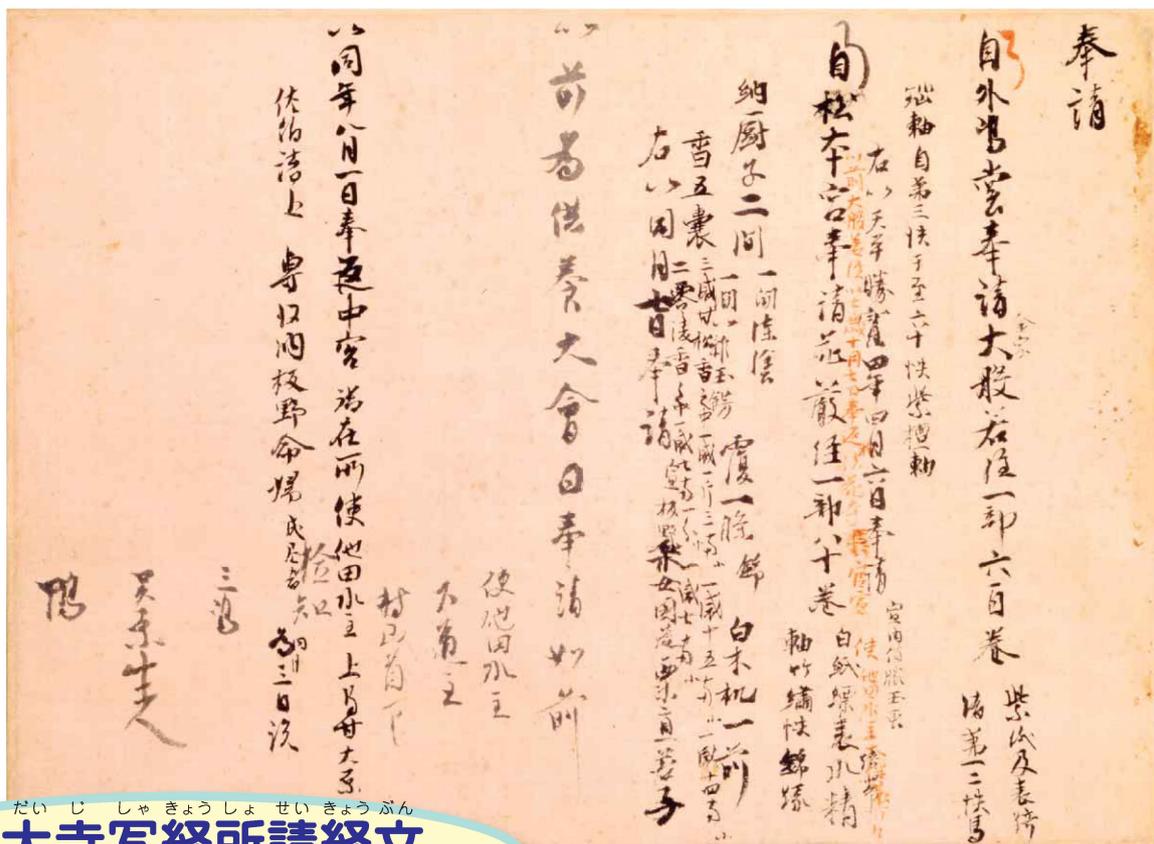


博物館ニュース

MUSEUM NEWS



とう だい じ しや きようしょ せい きよう ぶん
東大寺写経所請経文
 重要文化財(静岡県立美術館蔵)

静岡県立美術館が所蔵している「藤江家旧蔵小杉文庫」という資料群に含まれているものです。小杉文庫は、幕末から明治時代に活躍した徳島出身の国学者である、小杉楹邨（1834～1910）の蔵書の一部にあたります。静岡県の素封家藤江家が晩年の小杉の研究を支援したことから、彼の没後に譲られました。

小杉楹邨は、1834（天保5）年、徳島城下住吉島に生まれ、1910（明治43）年、76歳で世を去りました。彼は全国各地の旧家や寺社などを訪ねて、古文書・古典籍、金石文等多様な資料を調査、収集したことで知られています。その遺産として著名なのが、膨大な史料集『徴古雑抄』です。徳島関係の主要なものが『阿波国徴古雑抄』として刊行されており、今も徳島の歴史研究の必携書となっています。

さて、写真の資料は752（天平勝宝4）年の東大寺大仏開眼供養会に関するもので、造東大寺司写経所が外嶋堂と松本宮から經典を借用し、供養会の終後に返却したこと、このときに阿波国板野郡出身の女性である粟凡直若子が連絡に当たったことが分かります。

この資料は本来、奈良の正倉院文書に含まれていたものです。故郷である阿波に関する資料という意味で、小杉が調査に携わった際に彼の蔵書に加えられたようです。

この資料をはじめ、小杉楹邨ゆかりの資料や阿波の郷土史家の業績などを、企画展「郷土の発見—小杉楹邨と郷土史研究の曙—」で紹介します。
 （歴史担当：長谷川賢二）

世界的なアンモナイト産地：蝦夷層群

辻野 泰之

徳島県立博物館の常設展示室には、保存状態が非常に良い、数多くの北海道産のアンモナイトが展示されています。その保存状態の良さは、外国で産出したものと見間違ふほどです。北海道産のアンモナイトの多くは、蝦夷層群と呼ばれる地層から産出したもので、良好な保存状態と産出量の多さから化石愛好家の中でも憧れの化石産地になっています。ここでは、蝦夷層群とそこから産出するアンモナイトをはじめとする化石について紹介したいと思います。

蝦夷層群とは？

蝦夷層群は、北海道中軸部（南は浦河町周辺から北は稚内市宗谷岬まで）に分布する約1億2000万～6800万年前の白亜紀の地層です（図1）。

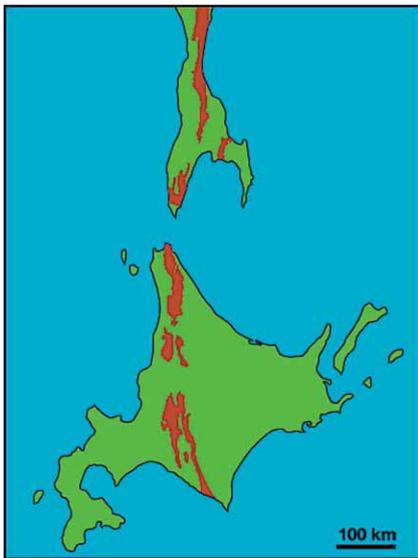


図1 茶色が蝦夷層群の分布。蝦夷層群に対応する地層がサハリンまで延びる。

蝦夷層群は地層の特徴に基づいて古い時代から順に下部、中部、上部、最上部の4つに区分されており、全体を通して海の比較的深い所から浅い所まで色々な環境で堆積した地層を見ることができます（図2）。（※蝦夷層群の最上部は函洲層群として区分されることもあります。ここでは蝦夷層群の中に含めます。）地層が堆積した時間も長く、また堆積環境も多様であるため、様々な種類の化石が産出します。



図2 蝦夷層群上部の地層の様子（羽幌町・逆川）。

蝦夷層群の成り立ち

蝦夷層群が堆積した白亜紀という時代には、現在のような日本列島と呼べるものはまだ存在しておらず、日本列島はアジア大陸の一部でした。同様に北海道も存在しておらず、北海道は西部と東部に分断されていました。北海道西部はアジア大陸の縁辺にあり、北海道東部は現在より北に位置していました。二つの地塊の間には、海溝と呼ばれる地形的に深い溝が存在し、アジア大陸縁辺には比較的浅い海域があり、そこで堆積したのが蝦夷層群です（図3）。

その後、新生代中新世（約2000万年前）にアジア大陸の一部であった日本列島が日本海の拡大によって大陸から分離しはじめました。北海道の東

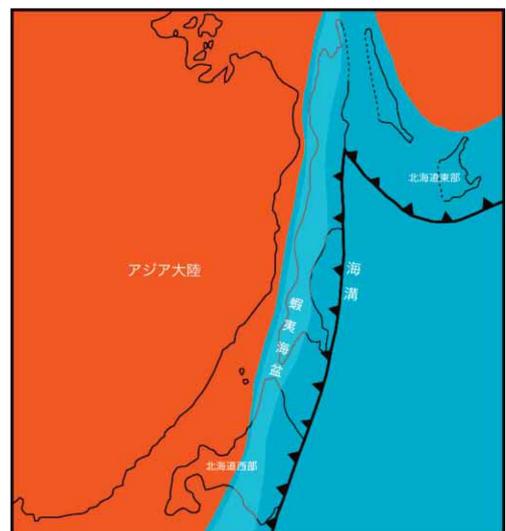


図3 約8000万年前の北海道周辺の古地理（君波,1989;重田,2001に基づいて作成）。

部の地塊は南下をはじめ、その後北海道の西部地塊と衝突を起こしました。その影響で北海道中軸部周辺には断層や褶曲が発達し、日高山脈のような地形的な高まりもできました。両地塊間の海底で堆積した蝦夷層群も隆起し、現在のような地層として地表に現れました。

産出化石

アンモナイトは示準化石と呼ばれる地層の時代決定に有効なグループであるため、蝦夷層群産のアンモナイトも古くから多くの研究者によって研究されてきました(図4)。これまでに蝦夷層群からは500種類以上のアンモナイトが報告されており、世界的に有名なアンモナイト産地になっています。サイズも小さなものから大きなものまで様々で、大きなものでは直径が1mを超えます。蝦夷層群で産出するアンモナイトの中で特に有名なものが、ニッポニテスと呼ばれるアンモナイトです(図5)。ニッポニテスは一般に知られている平面状に巻いたアンモナイトと異なり、巻きのほどけた独特な巻き方をした種類(異常巻きアンモナイト)で、世界中の化石愛好家の憧れの化石になっています。



図4 ゴードリセラス (*Gaudryceras tenuiliratum*)

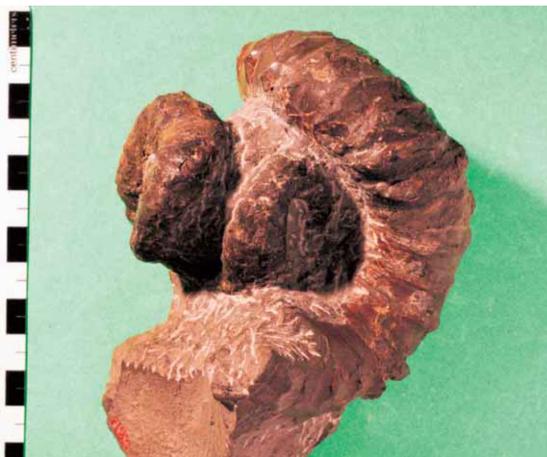


図5 ニッポニテス (*Nipponites mirabilis*)



図6 イノセラムス (*Inoceramus ezoensis*)

アンモナイトの他にも多く産出する化石が、イノセラムスと呼ばれる二枚貝です(図6)。イノセラムスも示準化石として利用できるため、さかんに研究されてきました。イノセラムスは白亜紀末に絶滅したグループで、その形態はアサリやハマグリといったよく知られている二枚貝と違い、殻の蝶番の構造も大きく異なります。その生態についても未だに謎の多いグループです。

以上のようなアンモナイトやイノセラムスは、蝦夷層群の中でも特に多産し、また地層の時代決定に有効な化石であるため、多くの研究がなされてきました。一方、蝦夷層群からは、アンモナイトやイノセラムス以外にも多くの二枚貝や巻貝、ウニなどの化石が産出します。また、数は少ないですが、海生爬虫類や恐竜の化石も産出しています。恐竜化石については、これまでに3例、小平町、夕張市、中川町からそれぞれハドロサウルス類、ノドサウルス類、テリジオサウルス類の産出が知られています。また、蝦夷層群から延びるサハリンの白亜紀層でも、1934年に日本人によって恐竜化石が発見されています。その後、この恐竜化石は、長尾巧博士(北海道帝国大学)によってニッポノサウルスと命名され、その標本は現在でも北海道大学に収蔵されています。

このように蝦夷層群は化石の宝庫であり、化石に興味がある方は、一度は北海道を訪れてみてはいかがでしょうか? 運が良ければ大型のアンモナイトを発見できるかもしれません。

(地学担当)

(参考文献)

君波和雄(1989)北海道周辺のテクトニクスに関するいくつかの新提案. 月刊地球. 11, 309-315.
重田康成(2001)アンモナイト学. 東海大学出版会.

「日本の地質百選」 に穴喰の漣痕が 選ばれました

日本列島では地震や火山活動、地すべりなど地質災害が頻繁に起こっています。一方、景勝地や観光地として親しまれている地形や地質事象もあります。このような日本列島の地質に関する理解の増進をはかるために、特定非営利法人地質情報整備・活用機構と社団法人全国地質調査業協会連合会が全国各地から「日本の地質百選」の公募を行ったところ、400点近くの推薦がありました。関連機関や地質関連の学協会、関係省庁で構成された「日本の地質百選選定委員会」が選定し、昨年5月に第一次選定分(83か所)を発表しました。その中には、富士山(山梨県・静岡県)、華厳の滝(栃木県)、鳥取砂丘(鳥取県)、秋吉台・秋芳洞(山口県)などの地質に関連した有名な景勝地や観光地のほか、佐渡金山(新潟県)や石見銀山(島根県)のような鉱山跡、中央構造線(長野県大鹿村と山梨県早川町の2箇所)のような断層露頭、さらには跡倉クリッペ(群馬県)や市木不整合(宮崎県)のような専門家以外にはほとんど知られていない露頭も含まれています。

その選定箇所のひとつとして、徳島県内から1



図1 穴喰の漣痕(海陽町穴喰浦、2008年2月撮影)。

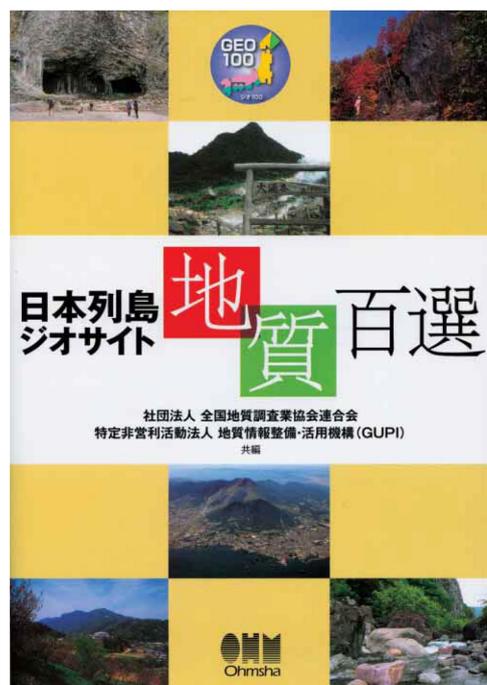


図2 「日本列島ジオサイト地質百選」地質百選を解説した現時点で唯一の単行本。
社団法人 全国地質調査業協会連合会、特定非営利活動法人 地質情報整備・活用機構 (GUPI) 共編、2007、(株)オーム社発行、181頁、2800円(税別)。

件、「穴喰浦舌状漣痕」(穴喰の漣痕: 図1)が選ばれました。海部郡海陽町穴喰浦から竹ヶ島方面へ向かう旧国道沿いに露出している有名な露頭で、国指定天然記念物にも指定されています。深海の海底扇状地で形成された地層と考えられており、その年代は微化石の分析から新生代古第三紀始新世中期(約4000万年前)であることが判明しています。解説書「日本列島ジオサイト地質百選」(図2)によると、穴喰の漣痕は群馬県瀬林などと並んで漣痕としてもっとも見事なものの一つであるとのこと。

博物館の常設展示室入口付近には、現地から直接型どりした複製が開館以来展示されているので、穴喰の漣痕のことはご存じの方も多いでしょう。この複製が作られたのは平成元年なので、ほぼ20年が経過しています。そのため現地と博物館の複製を比較すると実物は明らかに風化が進んでいます。現地で長く良好な状態で観察できることを望みたいものです。

なお「日本の地質百選」として四国ではほかに、サヌカイト(香川県)、砥部衝上断層(愛媛県)、龍河洞、横倉山・佐川、久礼メラングジュ(以上、高知県)が選ばれています。

(地学担当: 中尾賢一)

郷土の発見 こすぎ すぎ むら 一 小杉楯邨と郷土史研究の曙 一

近年、近世後半から近代にかけての阿波における歴史研究をめぐって、新たな資料の掘り起こしや当時の研究内容の検証がさかんになっています。その結果、埋もれた歴史家の存在や業績に光が当てられ、地域的な歴史研究の発展の足取りが明らかにされつつあります。あわせて、かつて否定的に評価されてきた近代の郷土史研究の意義も見直されています。

この展示では、阿波が生んだ「最後の国学者」と評される小杉楯邨をはじめとして、阿波の歴史を探り、記録してきた様々な歴史家たちの著作や蔵書の一端を紹介します。阿波の史学史とその意義、徳島における豊かな文化の土壌を知る機会となることを願っています。

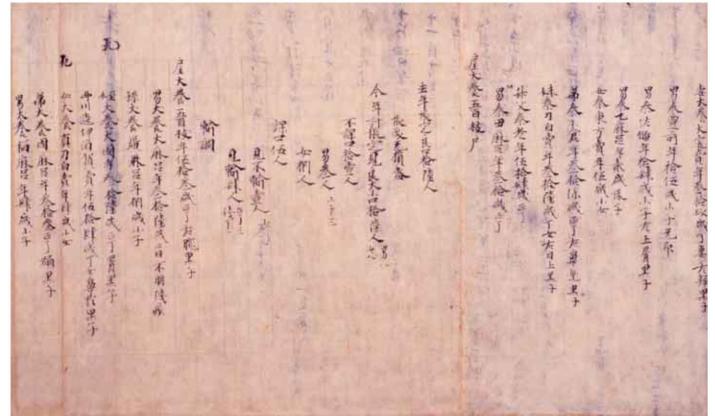


図1 小杉楯邨が収集していた山城国愛宕郡計帳断簡(部分) 重要文化財(静岡県立美術館蔵)

- 会 期 2008年4月26日(土)～5月25日(日)
- 休館日 4月28日(月)、5月7日(水)、5月12・19日(月)
- 観覧料 一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円

展示構成

- (1) 郷土の発見と記録
近世の歴史探究／郷土の記録とその広がり／幕末維新期の地誌編纂
- (2) 小杉楯邨とその周辺
ふるさと阿波／調査と集書／同郷の研究者
- (3) 郷土史の継承と広がり
探求と集書の継承／郷土の視覚化／郷土を超えたネットワーク

関連行事

- (1) 記念講演会(参加無料)
日 時 2008年5月18日(日)
午後1時30分～午後3時
会 場 文化の森・二十一世紀館 イベントホール
講 師 丸山 幸彦氏(奈良大学教授)
演 題 「阿波地域史研究の夜明け」
- (2) 学芸員による展示解説(観覧料が必要)
日 時 2008年4月29日(火/祝日)
5月11日(日)
午後1時30分～午後2時30分



図4 所々真景草稿(部分) 当館蔵

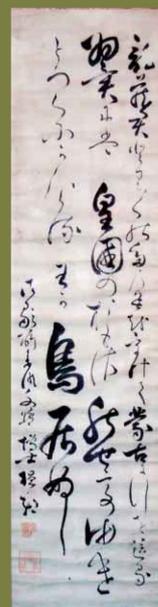


図2 鳥居龍蔵送別の和歌 小杉楯邨(徳島県立鳥居記念博物館蔵)

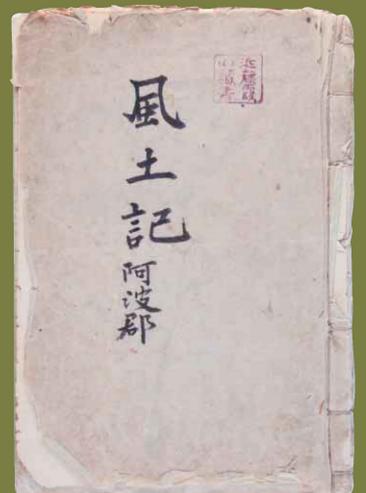


図3 風土記 阿波郡(個人蔵)

ひ どの だに ろう こつ き 樋殿谷の蔵骨器

樋殿谷遺跡は、阿讃山脈^{なんろく}南麓、鳴門市大麻町字樋殿谷に立地しています。1961(昭和36)年に、竹内倉之進氏がブドウ畑を耕作中に、偶然、蔵骨器を発見しました。蔵骨器は凝灰岩製で、地面を1mあまり掘り下げた後に、薄く木炭を敷いて、その上に安置され、人頭大の石で覆われていたと考えられています。

蔵骨器の中には、熟年男性と考えられる洗骨葬^{せんこつぞう}の人骨が納められており、金銅装方頭大刀^{こんどう装方頭大刀}1点、延喜通宝^{えんぎつうほう}13枚、刀子^{とうす}2点、砥石^{といし}1点が副葬されていました。洗骨葬は、いったん土葬した人体が骨ばかりとなつてから、それを掘り出してから拾い集め再埋葬^{さいまいそう}する方法です。

発見の翌年、1962(昭和37)年には、蔵骨器とその副葬品が県立博物館の前身である徳島県博物館で展示され、また、徳島県指定有形文化財(考古資料)にもなりました。昨年初めに、倉之進氏のご子息である進氏より徳島県立博物館へ寄贈されました。

蔵骨器は身が直方体で、中央に、上から見た形が長方形のくり込みがあり、下に行くほど狭くなっています。くり込みの縁に沿って出っ張りがあり、ここに蓋^{ふた}が合わさるようになっています。蓋の上面は屋根の形をしています(図1)。

副葬品の中では金銅装方頭大刀と延喜通宝が目を引きまします。金銅装方頭大刀は直刀平づくり形式で長さ70cmほどあったと思われます。刀身のほぼ中央付近で切断されており、先の方はほぼ直角



図1 凝灰岩製蔵骨器(長さ85cm)

に折れ曲がっています。金銅装方頭大刀は、最初の埋葬のときから副葬されていたのかもしれませんが。柄や鞘^{つか}に付属する刀装具^{きや}では、冑金^{かぶがね}、柄縁^{つかふち}、喰出鏝^{はみだしづば}、鞘口金物^{さやぐちかなもの}、足金物^{あしかなもの}などが残っています。刀身などの特徴から、奈良時代から平安時代初頭の一般的な刀身とされています(図2)。



図2 金銅装方頭大刀

延喜通宝は13枚の内11枚がほぼ完全な形で残っており、直径1.8cmほどあります。907(延喜7)年に初めて铸造^{ちゆうぞう}されており、皇朝十二銭^{こうちゆうじゅうにせん}のひとつです。958(天徳2)年には最後の皇朝十二銭である乾元大宝^{けんげんたいほう}が铸造されました。

飛鳥時代から奈良時代となって火葬の風習が広まり、火葬骨を入れる容器として蔵骨器が用いられるようになりました。火葬墓が営まれるのは人里離れた山の斜面が多かったようです。徳島でも鳴門から板野にかけての阿讃山脈南^{あざん}のゆるやかな斜面から蔵骨器と考えられる須恵器^{すゑき}の短頸壺^{たんけいぼ}が多く見つかります。樋殿谷遺跡と似たような立地の、板野町吹田高尾山から出土した須恵器三足壺^{さんそくぼ}は、足が獣の足の形をしています(図3)。

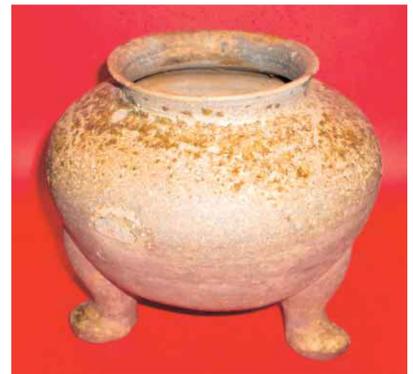


図3 須恵器三足壺

凝灰岩製の蔵骨器は少ないながらも火葬墓に類例があり、羽曳野市西浦から出土した奈良時代のものとよく似ています。年代については、金銅装方頭大刀と延喜通宝の年代から、この蔵骨器は10世紀前半のものと考えられます。

この蔵骨器は、常設展示室内の、古代・中世の阿波のコーナーに展示されています。

(考古担当：高島芳弘)

絶滅寸前!? 祖谷の美味しい 珍作物ヤツマタ

「日本に、しかもこの徳島にシコクビエが残っていたなんて！なんて素晴らしいだろう！」

もはや日本からこの作物は永遠に消え失せてしまったのに違いないと思い、諦めかけていた矢先のことです。テレビ局の方から“ヤツマタ”という作物について問い合わせがありました。はじめは、“ヤツマタ？ミツマタじゃないかしら？”と書いていたのですが、お話を伺ってみると、それはなんとシコクビエらしいのです。

さっそく調べてみると、ヤツマタとは、シコクビエの祖谷地方での呼び名で、穂が八本近くに分かれている形状からつけられた名前だとわかりました(図1)。

シコクビエは、アフリカのウガンダやエチオピアの高原地帯で、紀元前4000年頃に栽培化されたと考えられています。紀元前2000年頃にはインドに伝わり、やがて日本にももたらされました。かつては、日本国内でも各地で栽培されていましたが、現在では非常に稀になっているよう



図1 シコクビエの穂

です。ちなみに、シコクビエという名前は、四国地方で栽培されていたことに基づくとする説や、一升蒔くと四石採れることに基づくとする説などがありますが、定説はありません。

このシコクビエですが、実は以前実物を見たことがありました。とは言っても、それは日本ではなくネパールでのことです。ネパールでは、この作物を段々畑一面に栽培しています(図2)。あまりに多くて“こんなにシコクビエばかり作って一体どうするんだろう？”と思うほどの作付面積なのですが、その多くはお酒の材料になるようです。蒸したシコクビエの果実に麴を加え、2~3日温めておくとトゥンバと言う少し酸味があるお酒ができます(図3)。栽培時は、まず苗床を作り、後

に移植するのですが、これが田植えの起源になったという説もあります。このような栽培方法は、祖谷でも見られるようで、遠く離れた地域で共通の栽培方法をとることに不思議な感じがします。

さて、話を祖谷に戻しましょう。この話を聞いてから、なんとしても詳しいお話を伺いたくて、直接栽培者の方に電話をしてみることにしました。その方のお話によると、「現在は、祖谷でもほとんど栽培されて居らず、知人が知人にもらって、庭先で種子をつないでいたものをもらった。4升ほどの粒を粉にしたら1.5升になった。4~5月に種子を蒔く。粉を溶いてクレープ状に焼いたイリモチや団子にすると、とても美味しい」とのことでした。

“なるほど！そんなに美味しいのか！”このお話を伺ってからイメージがどんどん膨らんで、今、私の頭の中では、お月様のようなお団子がホワホワ〜ッと湯気を上げています。

(植物担当：茨木 靖)



図2 ネパールの棚田。ちょうどシコクビエの苗を植えたところ。



図3 トゥンバを飲む。(発酵させたシコクビエの果実にお湯を注ぎ飲む筆者。粒を飲み込まないように専用のストローを使って飲む。)

4月から6月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(定員)	備考
歴史体験	トンボ玉をつくろう①	4月20日(日)	13:30~16:30	高校生以上(20)	
	石ヤリをつくろう	4月27日(日)	13:30~16:00	小学生から一般(20)	
	トコロテンをつくろう②(実習編)	6月8日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(25)	①とセット
歴史散歩	トコロテンをつくろう①(出羽島を歩こう)	4月29日(火)	10:30~15:30	小学生から一般(25)	②とセット・現地集合
	古墳見学①(香川)(貸切バス使用)	5月11日(日)	8:30~17:00	小学生から一般(45)	バス代500円(大学一般)
野外自然かんさつ	海陽町穴喰浦~竹ヶ島の地質見学	4月20日(日)	12:00~16:00	小学校高学年以上(25)	現地集合
	白亜紀の地層見学(勝浦町)	5月11日(日)	13:00~16:30	小学生から一般(25)	現地集合
	磯の生きもの	5月18日(日)	10:30~12:30	小学生から一般(70)	現地集合
	浜辺の植物かんさつ	5月25日(日)	13:00~14:30	小学生から一般(15)	現地集合
ミュージアムトーク	徳島の前方後円墳*	6月29日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(50)	
室内実習	春の野草かんさつ	4月27日(日)	13:30~16:30	小学生から一般(20)	
	ミクロの世界~電子顕微鏡で植物を見よう①	6月22日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(10)	
歴史文化講座	小正月の火祭りと2つの左義長(海南文化館)*	5月25日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(50)	
	庸八焼きについて(海南文化館)*	6月22日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(50)	
企画展関連行事	企画展「郷土の発見」展示解説①*	4月29日(火)	13:30~14:30	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「郷土の発見」展示解説②*	5月11日(日)	13:30~14:30	小学生から一般	観覧料必要
	企画展「郷土の発見」記念講演会*	5月18日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(300)	
	企画展「香りの世界」関連「香りの植物を探そう①」*	5月11日(日)	13:00~16:00	小学生から一般(25)	現地集合
部門展示関連行事	部門展示「和泉層群の化石」展示解説	4月27日(日)	14:00~14:30	小学生から一般	観覧料必要
その他	こどもの日フェスティバル*	5月5日(月)	9:30~16:00	小学生から一般	

◎*印のある行事は、申し込み不要です。その他の行事は、往復はがきでお申し込みください。

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。

◎「古墳見学①(香川)」の行事は、大学・一般のみバス代500円が必要です。

◎企画展展示解説①・②は企画展観覧料が、部門展示展示解説は常設展観覧料がそれぞれ必要です(高校生以下は無料)。

●お申し込みについて●

- 1枚の往復はがきには、1行事のみご記入ください。
- 行事日の1カ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
- 返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。
- 希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。
- 原則として、参加費は無料です。

〈往信の表面〉

50	770-8070
往信	
徳島市八万町 向寺山	
徳島県立博物館 普及課	

〈返信の裏面〉

(何も書かない てください)

〈返信の表面〉

50	□□□-□□□□
返信	
あなたの 郵便番号	
住所	
氏名	

〈往信の裏面〉

1. 参加希望の 行事名
2. 参加希望者 全員名(学年)
3. 住所
4. 電話番号

博物館友の会に入会しませんか！

博物館友の会は、さまざまな活動を通じて自然や文化に親しむとともに、会員相互の交流をはかっています。2008年度も会員が計画した行事が予定されています。みなさんも参加してみませんか？

- 年会費 ・個人会員2000円 ・家族会員3000円
- 会員の特典 ・年間を通して博物館の常設展、企画展の観覧料が無料になります。
・催し案内、博物館ニュース、会報等が送付されます。

くわしくは友の会事務局まで



友の会行事「新緑の高丸山を歩こう」

博物館ニュース No.70

■発行年月日 2008年3月25日
■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp